

# 視覚・聴覚障害学生に対するイメージの意味構造

——中学生・高校生・大学生についての検討——

豊村和真  
菊池麻里

目次  
はじめに  
目的  
方法  
調査用紙  
調査手続き  
結果  
考察  
まとめ  
引用文献

## はじめに

### 障害者に対するイメージについて

障害者に対するイメージや態度は、障害者との共生において重要な要因であると思われる。

イメージは、普通には心像と訳され、心的イメージのこととされ（有斐閣）、記憶さらには心的回転などの認知的研究で使用されるが、障害との関連性についてはあまり語られないことが多い。

飽戸（1970）はイメージについて、「行動への準備状態変数のうちの一つであり、態度と異なり、安定性に乏しく、短期的なものでもよく、また意識と異なり、一貫性に欠け、きわめてあいまいで、漠然とした情緒的なものも含まれる。しかも、（中略）きわめて複雑で微妙な心的特性の複合体である」と定義しており、消費生活、政治活動、社会生活の

研究からイメージと行動との間には非常に強い相関関係があることを明らかにしている。

その一方で、飽戸（1970）は従来の研究における意識や態度の中にはイメージが含まれていることを指摘し、さらに、イメージがきわめて構造化されたものであり、イメージの構成要素同士が密接に関連しているため、ある部分に変化すると他の部分も必然的に変化すると述べている。

障害者に対する態度やイメージの中には、両面感情的な要素が存在している（Katz et al.,1988）ことから、河内（2001）は刺激対象から個人が受け取る情緒の意味の中には相反する可能性があるとして指摘している。

これらからイメージと態度の用語に関しては、その使われ方もまちまちであることが容易に推測される。本研究ではその定義の細部に立ち入ることは避け、先行研究での用語をそのまま使用して、この領域の知見の概略をまず述べる。

### イメージ分析方法について

飽戸（1970）は、直接イメージや好みを測定する方法として、自由連想法、制限連想法、評定尺度法、SD法の4つを挙げている。

自由連想法は、回答者にある事柄について思い浮かんだものを次々に挙げさせる方法である。イメージの違いがどこにあるか等を分析できるという長所がある一方で、ある事柄

キーワード：障害、イメージ、発達の変化

の特徴を直感的に鋭く描き出すことはできるが、解釈は分析者の主観に強く依存し、比較のための共通次元を得がたく、定量的な分析は難しい方法である。

制限連想法は、予め連想できる言葉を用意し、回答者に当てはまるものを選ばせる方法である。自由連想法ほど独創的な回答は得られず、常識的なイメージしか捉えられないが、客観的に比較考察することができる。

評定法は、いくつかの文章または単語を挙げ、それらがどのくらい当てはまるかという程度を5段階や7段階で評定させるものである。実施は容易で分析も容易であるが、最初の文章または単語の選択の妥当性が問われる。

SD法はある事柄に対し、形容詞対ごとに何段階かで評価させるものである。事柄によってどのように異なるのか、多次元的に比較することができるが、多くの対象を標的とした場合には、当該分野の情報量のかなりの部分が失われてしまう危険性があるという(河内, 2001)。

### 障害者に対するイメージ研究

河内(2001)は、視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造を解明するため、体育学系の男子学生108名と教育・社会学系の男女の学生137名にイメージ連想テストを実施した。得られた記述語をKJ法で分類し、43項目を選び、標的概念(「自分自身」「学力優秀な学生」「視覚障害学生」「聴覚障害学生」「好みの女子学生」「好みの男子学生」の6つ)と記述語の相互関連を数量化Ⅲ類を用い、検討した。その結果、両障害の標的概念は障害、性、学科を越え、「痛ましさ」と「忍耐力」の軸に囲まれた意味空間に位置していた。また、これらの標的概念は「好みの女子学生」と「学力優秀な学生」の標的概念とは最もかけ離れていることが明らかにされた。さらに、両障害の標的概念について記述語別の出現頻度を求めた

ところ、「視覚障害学生」は努力家で強く素晴らしいが、大変で苦しいという相反する記述語が共存していた。「聴覚障害学生」も全体的にはこれと類似していたが、性格面では前者が暗く、後者が明るいなど、部分的に障害種別の違いが見出された。

中司(1988)は、SD法を用いて日本と韓国の大学生が肢体不自由児に対してどのようなイメージを持っているかを研究した。その結果、日本では肢体不自由児はやや遅いが強く陽気な存在であるというイメージが持たれていた。一方、比較対象概念である盲児に対しては、どちらかと言えば遅く、暗いが、静かな存在であるというステレオタイプのイメージが残存していたことが指摘された。さらに、前研究と比較しイメージの変化を調べたところ、肢体不自由児は幾分変化が見られたが、盲児のイメージは変化していないことが報告された。

河内(1996)は、小学生が抱く視覚障害児に対するイメージ構造を解明するため、SD法を用いた。小学校6年生120名に、23対の記述語を6つの概念ごとに7段階尺度で回答させた。その結果、障害の有無に関係なく「対人」「活力」「学力」の3つの因子(属性)が見出された。成人のイメージ構造には、このような共通性は見られず、概念が異なれば、属性内容も異なり、障害固有の属性も見られるなど、より分化したものになっている(中司, 1988; 島田ら, 1974)と述べ、小学校6年生段階のイメージ構造は、まだ発達過程にあることが示唆された。

また河内(1993)は、視覚障害児を含む10タイプの児童に対し小学6年生の抱くイメージ相互の関係とその意味構造について調査した。5年生を対象に「好悪」「学力」「障害」「統制」(前3つの側面と評定者の関係を示す)の側面に基づいた10の刺激語に対し連想法を実施し、25対の記述語尺度を作成した。これを6年生に7段階評定させた。その結果、友

達イメージの相互関係については、「障害因子」と「好悪因子」とに二分されたが、両者は直交しており、視覚障害児が直接的には嫌われていないものの、仲間扱いもされていないことが推察された。また障害因子の内容から、視覚障害児は真面目で頭が良いという児童特有のイメージと共に、静かで暗いという大学生のイメージと共通するものも見出された。友達イメージの意味構造は「対人」「活力」「学力」の3次元構造を成していたが、対人関係が最も支配的であったことが報告された。

山内（1984）は、小学生2～6年生を対象に視覚障害児に対する態度の変容に及ぼす対人的接触の効果を検討するために、盲児との交流前後で6項目5段階評定を実施した。また盲児に対する心理的距離を、5段階評定させた。その結果、高頻度に盲児と関わった低学年が最も態度を変容する傾向が強かったことが報告された。心理的距離においても、高学年より低学年の方が接触後の心理的距離を短くした者が多かったことが判明した。それから、高学年は低学年に比べ、接触経験を持った者が多かったにもかかわらず、イメージは低学年よりもポジティブではなかったが、交流後にはポジティブに変容した。このことから、高学年の態度も必ずしも固定的なものではなく、教育的配慮のもとに行われた対人的接触によってポジティブに変容しうることが示唆された。

河内（2001）は、視覚障害学生及び聴覚障害学生に対しこれまでの研究にはない賞賛的評価を得られたことに対し、大学に進学した視覚障害者は視覚障害者の中でも障害を乗り越えた特別な存在であるためと考察しているが、吉本（1973）の調査では「力強い」という肯定的なイメージの存在が認められている。

### 障害者に対する態度研究

障害者に対する態度に関する研究はある程

度存在するが、イメージ研究に近いものを以下にいくつか示す。

河内（1990）は、肢体不自由者（児）への態度構造を解明し、得られた因子と専攻学科及び性別との関連を考察するため、肢体不自由に関する54項目（7段階尺度）への回答を特殊教育学の講座を受講する必要がある人間学とその必要のない児童学および経済学を学ぶ大学生394名に求めた。その結果、5つの因子が得られ、「共に生きることへの拒否」「情緒不安定な性格」「社会的援助」の3因子で専攻学科、あるいは性別との間で有意な関連が見られた。すなわち、人間学及び児童学専攻の学生は肢体不自由者を拒否、あるいは情緒不安定と見ることに反対するのに対し、経済学専攻学生はそれとは逆の傾向を示した。

湯浅ら（1996）は、障害児・者に対する差別・偏見の意識構造を検討するため、大学生に36項目7段階尺度の質問紙を回答させた。その結果、5つの因子が抽出され、大学生の意識には強い差別性と「たてまえ」の意識の存在をあることが示唆した。

都築（1997）は、障害者に対する学生の態度を専攻及び障害別に検討するため、障害児教育専攻34名、非障害教育専攻39名および工学部76名の大学生に対し99項目5段階尺度の質問紙を実施した。その結果、運動障害者は最も否定的な見解が成され、聴覚障害者は最も好意的に受け止められていることが判明した。また、教育学部生は、聴覚障害者の統合教育に賛意を示し、障害児教育に関心が向いている障害児教育専攻群のほうがより障害者に対して好意的な感情を持っていることを明らかにした。

生川・那須（2001）は、福祉を専攻する大学生とそれ以外を専攻する大学生の知的障害者に対する態度について、性別と関連付けて研究を行うため、社会福祉学科の学生及びそれ以外の専攻学生230名に5段階尺度からなる25項目の態度項目を回答させた。その結果

5つの因子が抽出され、そのうち4因子について検討された。すなわち「実践的好意」および「理想的好意」因子では、社会福祉以外の男子学生の好意度が有意に低く、それ以外の3群では知的障害者に対して好意的であることが明らかとなった。また「社会参加同意」では社会福祉専攻学生の方が福祉以外の専攻学生よりも好意的であることが判明した。

島田ら(1974)は、心身障害者の職業に対する雇用主及び従業員の態度を7段階尺度の22の形容詞対を用いて検討した。その結果、心身障害者を表す刺激語は健常者を中心とする刺激語群とはほぼ正反対の位置にあることが判明した。しかしながら、障害の種類による態度の違いは見られなかった。

河内(1979)は、視覚障害者(児)に対する学生及び教師の態度構造について研究するため、視覚障害者及び正眼者に対し面接を行い、視覚障害者(児)の意見項目を収集した。そして、得られた情報から204項目7段階評定の質問紙を作成し、特殊教育専攻学生、それ以外の専攻学生(一般学生)、盲学校教師及び普通校教師に回答させた。なお質問紙は自己の意見と社会的望ましさの2種類であった。その結果、両視点に9つの共通の因子が抽出され、自己の意見ではさらにもう1つの因子が得られた。「一般化された拒否」「統合教育」「特殊教育」の因子では、障害関係群と無関係群に態度の相違が見られ、「相互作用についての当惑」では一般学生と盲学校教師に態度の違いが見られた。この相違は、視覚障害者(児)を同じ人間としてみるか否かにその原因があると述べており、知識だけでは視覚障害者(児)問題の解決にはならず、社会との交流の重要性を指摘している。

#### イメージの発達的变化について

発達段階別に障害者のイメージを見ることは、児童が持っている障害者の特有のイメージ(河内, 1993)がどのように、いつ頃から

変化するのか、あるいは固定するのか(山内, 1984)を理解する上で重要である。山本(2004)は、青年期を青年前期(思春期; 12~13歳から15歳頃, 中学生時代), 青年中期(15~16歳から18~19歳頃, 高校生時代), 青年後期(19歳頃から成人まで, 大学生時代)の3段階に分け、発達の特徴について次のように述べている。まず思春期に入ると、興味が外界にあって外向的態度が中心であった児童期に比べ、内向的態度と外向的態度が入り混じった状態になると指摘している。一方、青年後期では、青年前期・中期で見られた情緒的起伏に落ち着きが見られるようになり、アイデンティティの確立に向けて自己を見つめていく時期であるとしている。この時期には確固とした自分を見出せず、心理的に葛藤に悩まされたり、無気力症(アパシー)に陥ったりする可能性があるとして述べている。このように、中学生、高校生及び大学生では発達段階に特徴があることから、障害者のイメージに関しても違いが見られるのではないだろうか。

#### 先行研究の総括

イメージの研究方法及び障害者のイメージまたは態度に関連のある先行研究について述べてきたが、イメージを含めて態度を解釈した研究が存在していた。また性別や専攻学科別から障害者のイメージを検討した研究が多く、調査対象者も大学生であることが多かった。加えて小学生を対象にした研究もいくつかなされていたが、中学生及び高校生を対象にした発達の的に検討した障害者のイメージ研究はほとんどないが、小学6年生ではまだイメージが安定していないことから、それより上の学年について発達の的な変化を見る必要がある。

障害者に対して肯定的なイメージの存在を示唆するものがあり(吉本, 1987)、さらにイメージと行動との間に強い相関が認められる(鮎戸, 1970)ことから、障害者のイメー

ジについて調査すること、両面感情的な要素の存在やイメージの構造化についても注意を払う必要があり、解釈に客観性を保てる制限連想法を用いるのがよいと思われる。

## 目的

上記先行研究の総括の各視点に注意を払いながら、中学生～大学生について、障害のある生徒（学生）に対するイメージを、他の生徒（学生）および自分自身と対比して明らかにするとともに、それらイメージの発達の特徴について検討することを目的とする。

## 方法

### 被験者

調査対象は同一市内の学生生徒で、大学文学部、経済学部、社会福祉学部の学生（男性65名、女性146名の計211名；有効回答率95%）、同一市内の高等学校の1,2年生（男性93名、女性129名の計222名；有効回答率98.2%）、同一市内の中学校1,2年生（男性60名、女性63名の計123名；有効回答率97.6%）総計556名であった。全てを総称して以後「学生群」という。

### 調査用紙

「視覚障害の生徒」及び「聴覚障害の生徒」の対照概念として、河内（2001）に従い、対人魅力の領域から対人魅力を持ちたいと思う

「好みの女子生徒」と「好みの男子生徒」を、また個人的能力の分野では学校生活において重要な学業に関し「学力優秀な生徒」を選び、「自分自身」を加えたこれら6項目を「標的概念」として設定した。大学生の調査用紙ではそれぞれの標的概念中の「生徒」は「学生」に置き換えた。そしてこれらの標的概念にあてはまるイメージとして後述する29の形容詞（以後「形容詞群」）を設定した。

河内（2001）のイメージ連想テストで得られた131の形容詞のうち、出現頻度100以上の語「努力家の」「強い」「やさしい」「素晴らしい」「美しい」を採用した。次に、ネガティブな語とポジティブな語のバランスに配慮するため、先行研究で得られた形容詞を基に対になるような語を検討した。その際、井上・小林（1985）が算出した形容詞対の使用頻度及び因子負荷量を参考にした。その結果、「苦しい」「楽しい」「自由な」「不自由な」「弱い」「意欲的な」「無気力な」「責任感のある」「無責任な」「落ち着いた」「落ち着きのない」「こわい」「真面目な」「不真面目な」「積極的な」「消極的な」「明るい」「暗い」「素直な」「強情な」「格好の良い」「うらやましい」の22の形容詞を選出した。以上27の形容詞を10名の研究協力者とともに比較検討した結果、上述した27の形容詞に「性格の良い」「なまけ者の」の2つの語を加えた計29の形容詞を採用した。これを表1に示し、以後は分析ソフトウェアの都合で番号と共に略称で記述する。

これらの形容詞は、「自分自身」「学力優秀

表1 使用した形容詞一覧

1 弱い	2 苦しい	3 不自由な	4 努力家の	5 意欲的な
6 無責任な	7 こわい	8 真面目な	9 格好の良い	10 消極的な
11 落ち着いた	12 明るい	13 暗い	14 楽しい	15 なまけ者の
16 素晴らしい	17 性格の良い	18 積極的な	19 素直な	20 美しい
21 やさしい	22 不真面目な	23 無気力な	24 強情な	25 強い
26 自由な	27 落ち着きのない	28 責任感のある	29 うらやましい	

な生徒」「視覚障害生徒」「聴覚障害生徒」「好みの女子生徒」「好みの男子生徒」の6つの標的概念ごとに、各標的概念の下においた。標的概念は1ページに2つつおいた。ただし質問の最初のページには、「次に挙げる人物に対し、イメージすることを下記の形容詞から選び、丸で囲んでください。(当てはまるものを、いくつでも)」という教示を記載し、例を示した。系列位置効果の影響を排除するため、形容詞の語順を表1の順であるものと、その語順を反対にしたものの2パターンを用いた。

## 調査手続き

大学での調査は講義時間中に配布し、その場で回答させ回収した。中学校及び高校においては各クラスの教師が配布し、その場で回収した。質問紙は形容詞の配列が異なる2種類を用意し、これらの質問紙はどのクラスでも疑似ランダムに均等になるよう配布した。

質問紙の表紙に性別や年齢、学年など被験者の属性を記入する項目を置き、順に記入させた。2ページ以降には「自分自身」「学力優秀な生徒」「視覚障害の生徒」「聴覚障害の生徒」「好みの女子生徒」「好みの男子生徒」の順に6つの標的概念に対し、それぞれ当てはまるものを各標的概念の下に記述された後述する29の形容詞群からいくつでも選ばせ、それらを丸で囲ませた。また「好みの女子生徒」及び「好みの男子生徒」の標的概念では、同性の場合には友人としてのイメージであると書いた。

なお、調査期間は2005年10月13日から同年11月2日までであった。

## 結果

分析にはSPSS (14.0J) およびSAS (9.13) を使用した。

## 標的概念に対するイメージの全体構造

29の形容詞群を各学生群×標的概念別に選択数を求め、それに対して対応分析 (Correspondence Analysis; コレスポネンス分析) を行った。累積寄与率は第1成分が37.72%、第2成分までで69.93%、第3成分までで88.72%であり、第4成分以下では微増であったため、まず3成分までを採用した(表2-1)。形容詞の成分の内訳を表2-2に示した。

表2-1 学生群の対応分析結果

	単相関係数	固有値	寄与率	累積寄与率
成分I	0.53505	0.28628	37.72	37.72
成分II	0.49443	0.24446	32.21	69.93
成分III	0.37758	0.14257	18.79	88.72
成分IV	0.20093	0.04037	5.32	94.04
成分V	0.12103	0.01465	1.93	95.97
成分VI	0.10186	0.01038	1.37	97.33

得られた形容詞の成分の重み係数のうち絶対値が0.7以上のものを取り出すと以下のようになった。

成分Iは値の大きい順に、「v3 不自由な」、「v2 苦しい」、(ここから負)「v14 楽しい」、「v20 美しい」であった。成分IIは、値の大きな順に、「v15 なまけ者の」、「v6 無責任な」、「v23 無気力な」、「v27 落ち着きのない」、「v10 消極的な」、「v24 強情な」、「v1 弱い」であった。成分IIIは同様に、(ここから負)「v8 真面目な」、「v29 羨ましい」、「v22 不真面目な」が抽出された。

対応分析においては成分の解釈は必ずしも行われるわけではないが、敢えて言えば、成分Iは自由-不自由または認識の基本的な差異を表しているように考えられる。成分IIは、河内(2001)の研究で得られたスチューデント・アパシー因子と類似している。これらの成分は一応そのように解釈しておく。なお成分IIIは解釈しにくい。

表 2-2 学生群における記述語の成分

変数	形容詞	成分 I	成分 II	成分 III
v1	弱い	0.494	0.744	0.196
v2	苦しい	1.158	0.254	0.472
v3	不自由な	1.425	-0.004	0.656
v4	努力家の	0.476	-0.171	-0.225
v5	意欲的な	0.127	-0.137	-0.299
v6	無責任な	-0.422	1.690	-0.181
v7	こわい	0.581	0.323	0.136
v8	真面目な	0.317	-0.060	-0.743
v9	格好の良い	0.242	-0.337	0.223
v10	消極的な	0.174	1.119	-0.036
v11	落ち着いた	0.159	-0.059	-0.291
v12	明るい	-0.524	-0.102	0.251
v13	暗い	0.552	0.407	-0.421
v14	楽しい	-0.711	-0.218	0.248
v15	なまけ者の	-0.525	1.926	-0.064
v16	素晴らしい	-0.068	-0.412	-0.351
v17	性格の良い	-0.443	-0.451	0.264
v18	積極的な	0.016	-0.198	-0.197
v19	素直な	-0.180	-0.090	0.229
v20	美しい	-0.786	-0.521	0.314
v21	やさしい	-0.348	-0.308	0.297
v22	不真面目な	0.210	-0.385	-1.405
v23	無気力な	-0.193	1.537	-0.093
v24	強情な	-0.222	0.936	-0.395
v25	強い	0.461	-0.217	0.314
v26	自由な	-0.596	0.300	0.136
v27	落ち着きのない	-0.440	1.433	0.085
v28	責任感のある	-0.417	0.283	-0.002
v29	うらやましい	-0.185	-0.544	-0.873

学生群別標的概念の成分

次に、標的概念の成分を学生群別に分析した結果を表3に示した。この結果を両眼視による立体図で表示したのが図1である。

図1は平行法（無限遠を見るようにする）により作成した図であり、上下の図は軸を変えただけで同じ図である。Z1～Z3が第I成分～第III成分にあたる。上下は軸を変えただけで同じ図である。大きく4群に分離したことがわかる。

若干見にくいいため、第I成分と第II成分を

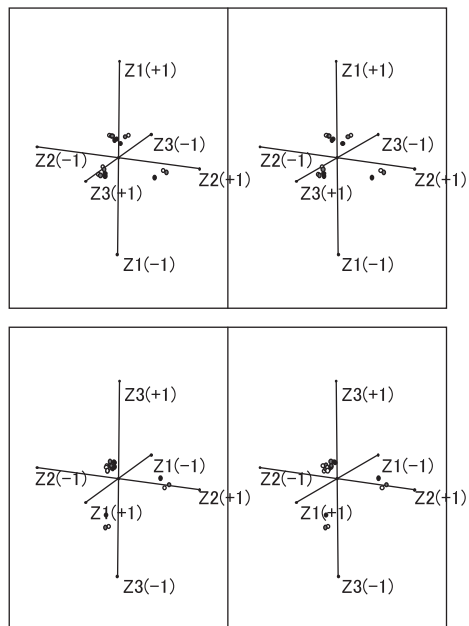


図1 学生群別対応分析結果立体視表示  
平行法での立体視表示。上下は軸を変えただけで同じ図である

2次元表示したのが図2である。図2は学生群をそれぞれ中、高、大で、「自分自身」を「\_自」で、「学力優秀な生徒」を「\_秀」で、「視覚障害の生徒」を「\_盲」「聴覚障害の生徒」を「\_聾」「好みの女子生徒」を「\_女」「好みの男子生徒」を「\_男」で表示した。

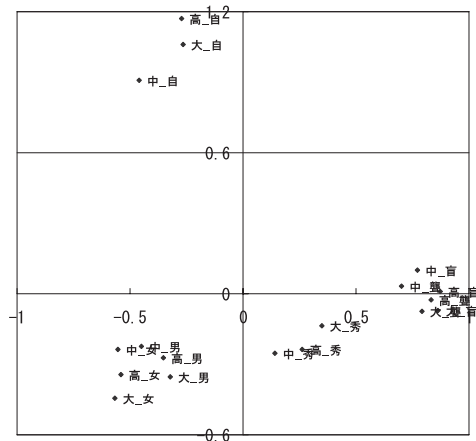


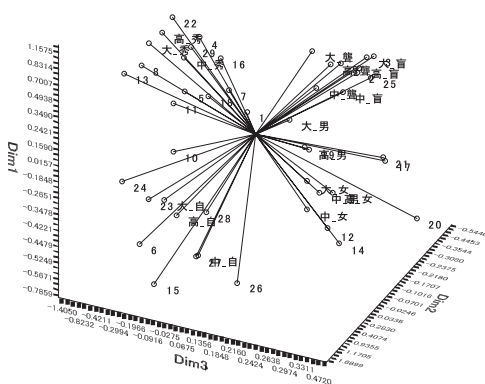
図2 学生群別対応分析結果2次元表示  
横軸は成分 I（自由～不自由） 縦軸は成分 II（アパシー）

図1から標的概念の差異は大きく、学生群別の差異は比較的小さいことが分かる。図2により、クラスターをなす概念は「自分自身」、「好みの女子生徒」と「好みの男子生徒」、「学力優秀な生徒」、「視覚障害の生徒」と「聴覚障害の生徒」の4つになることが示された。これらのクラスターを以後、それぞれ「自分自身群」、「好みの生徒群」、「学力優秀群」、「障害群」と呼ぶ。

標的概念と形容詞群の対応

さらに、このデータに表2-2の形容詞を同時に表示し、標的概念と形容詞群の対応を見たものが図3である。図3では表示の都合で形容詞は番号で表示している。なお重心から各変数まで補助線が引かれている。

その結果、視覚障害生徒(学生)と聴覚障害生徒(学生)は両標的概念で一つの群を成し、形容詞である「v1 苦しい」「v3 不自由な」と重心から同じ方向で近い位置にあった。



注 v1-v29は表2-2の記述語と対応

図3 重み付けによる学生群の成分散布

どちらかと言うと、聴覚障害よりも視覚障害のほうが成分Ⅲの原点から離れていた。自分自身は、「v6 無責任な」「v15 なまけ者の」「v23 無気力な」「v27 落ち着きのない」「v24 強情な」「v28 責任感のある」の近くに位置して、一つの群を成していた。しかし中学生の標的概念は、成分Ⅱの軸を見ると大学生や高校生の標的概念とはやや距離があった。す

表3 学生群×標的概念の成分

変数	学生群×標的概念	成分 I	成分 II	成分 III
s1	大学/自分自身	-0.265	1.061	-0.092
s2	高校/自分自身	-0.272	1.171	-0.028
s3	中学/自分自身	-0.459	0.908	0.038
ex1	大学/学力優秀	0.349	-0.135	-0.823
ex2	高校/学力優秀	0.263	-0.237	-0.865
ex3	中学/学力優秀	0.141	-0.253	-0.661
bl1	大学/視覚障害	0.861	-0.070	0.342
bl2	高校/視覚障害	0.874	0.009	0.368
bl3	中学/視覚障害	0.772	0.102	0.331
df1	大学/聴覚障害	0.792	-0.073	0.242
df2	高校/聴覚障害	0.831	-0.025	0.293
df3	中学/聴覚障害	0.701	0.034	0.284
g1	大学/好みの女子	-0.567	-0.445	0.086
g2	高校/好みの女子	-0.540	-0.344	0.201
g3	中学/好みの女子	-0.555	-0.238	0.185
b1	大学/好みの男子	-0.321	-0.354	0.068
b2	高校/好みの男子	-0.352	-0.273	0.157
b3	大学/好みの男子	-0.448	-0.225	0.216



なわち、大学生・高校生は「v6 無責任な」「v23 無気力な」「v24 強情な」という形容詞と近い関係にあったが、中学生はそれよりも「v28 責任感のある」「v27 落ち着きのない」「v15 なまけ者の」と近い距離にあり「v26 自由な」の近くにもあった。学力優秀な生徒（学生）は、「v4 努力家の」「v8 真面目な」「v16 素晴らしい」「v29 うらやましい」「v22 不真面目な」「v11 落ち着いた」「v5 意欲的な」「v10 積極的な」の形容詞群の中に位置していた。前述した2群と比べると、ばらつきが見られた。好みの男子生徒（学生）と好みの女子生徒（学生）も同じ群に属していると考えられる。しかしながら、好みの女子生徒（学生）の方が好みの男子生徒（学生）よりも成分Ⅰの原点から離れた距離にあった。プロットした図を見ると、好みの女子生徒（学生）は「v17 性格の良い」「v20 美しい」「v21 親切的な」の形容詞の近くにあった。また大学生の好みの女子学生の標的概念は、「v12 明るい」「v14 楽しい」とも近接していた。一方、好みの男子学生は「v21 親切的な」「v17 性格の良い」の近くに位置した。

#### 学生群別視覚障害・聴覚障害別形容詞出現頻度

次に、視覚障害生徒（学生）及び聴覚障害生徒（学生）の標的概念に対し想起された形容詞の出現頻度を学生群別に算出し、出現率を求めた（表4参照）。

表4の枠で囲った形容詞、すなわち大学生の「v3 不自由な」および「v9 格好良い」は視覚障害の生徒と聴覚障害の生徒間での選択率の差が10%以上あったが、いずれも視覚障害の生徒の出現率が高かった。また表4では学生群別に選択率が20%を超える形容詞の該当学年の数値を網掛けで表示した。

#### 視覚障害の生徒（学生）について

全ての学生群に共通して出現率が20%以上

だった形容詞は、「v3 不自由な」「v4 努力家の」「v25 強い」「v9 格好良い」「v2 苦しい」であった。中学生のみで出現率が20%以上の形容詞は「v21 親切的な」「v11 落ち着いた」であり、「v1 弱い」は高校生と中学生で20%を超えた。

#### 聴覚障害の生徒（学生）について

視覚障害同様に、全ての学生群に共通して出現率が20%以上だった形容詞は、「v3 不自由な」「v4 努力家の」「v25 強い」であり、中学生のみで出現率が20%以上の形容詞は「v21 やさしい」「v11 落ち着いた」であった。これは視覚障害と全く同一であった。また高校生および中学生で出現率が20%以上の形容詞は「v2 苦しい」であった。

## 考察

#### 学生群のイメージの意味構造

単相関係数（0.3以上）と累積寄与率を考慮し、成分Ⅲまでを採用した。そこで、形容詞の各成分の重み係数のうち絶対値が0.7以上のものを取り出すと結果で示したように以下ようになった。

成分Ⅰは値の大きい順に、「v3 不自由な」、「v2 苦しい」、「v7 こわい」、「v12 明るい」、「v14 楽しい」、「v20 美しい」であった。成分Ⅱは、同様に大きい方から、「v15 なまけ者の」、「v6 無責任な」、「v23 無気力な」、「v10 消極的な」、「v24 強情な」、「v1 弱い」であった。成分Ⅲは同様に、「v8 真面目な」、「v29 羨ましい」、「v22 不真面目な」が抽出された。

これらの成分の解釈として、結果では、一応、成分Ⅰは自由・不自由を表し、成分Ⅱは、河内（2001）の研究で得られたスチューデント・アパシー因子と類似していることから、スチューデント・アパシー度を表し、成分Ⅲは不明とした。

表4 学生群別障害別標的概念における形容詞の出現率

形容詞	視覚障害の生徒			聴覚障害の生徒		
	大学生	高校生	中学生	大学生	高校生	中学生
V3 不自由な	0.767	0.728	0.740	0.645	0.663	0.658
V4 努力家の	0.439	0.502	0.438	0.398	0.542	0.463
V25 強い	0.313	0.460	0.235	0.276	0.426	0.236
V9 格好の良い	0.279	0.232	0.242	0.014	0.005	0.066
V2 苦しい	0.209	0.243	0.334	0.190	0.217	0.269
V5 意欲的な	0.168	0.146	0.105	0.196	0.185	0.106
V18 積極的な	0.166	0.135	0.049	0.161	0.154	0.073
V21 やさしい	0.164	0.159	0.228	0.151	0.157	0.220
V1 弱い	0.150	0.256	0.221	0.117	0.170	0.147
V11 落ち着いた	0.147	0.190	0.266	0.134	0.147	0.267
V8 真面目な	0.136	0.110	0.138	0.185	0.165	0.164
V19 素直な	0.133	0.186	0.179	0.127	0.187	0.169
V17 性格の良い	0.109	0.102	0.187	0.112	0.082	0.146
V10 消極的な	0.090	0.099	0.122	0.062	0.060	0.073
V13 暗い	0.077	0.138	0.178	0.021	0.085	0.132
V28 責任感のある	0.065	0.034	0.073	0.057	0.046	0.097
V12 明るい	0.064	0.090	0.105	0.081	0.127	0.154
V16 素晴らしい	0.039	0.082	0.164	0.058	0.062	0.138
V7 こわい	0.039	0.043	0.065	0.024	0.034	0.033
V20 美しい	0.021	0.015	0.016	0.021	0.016	0.017
V26 自由な	0.018	0.022	0.033	0.025	0.022	0.041
V27 落着きのない	0.015	0.033	0.016	0.011	0.033	0.016
V23 無気力な	0.011	0.015	0.081	0.019	0.005	0.041
V29 うらやましい	0.011	0.005	0.000	0.007	0.011	0.000
V6 無責任な	0.008	0.004	0.016	0.000	0.004	0.008
V22 不真面目な	0.008	0.000	0.008	0.011	0.000	0.008
V14 楽しい	0.003	0.004	0.040	0.018	0.024	0.082
V24 強情な	0.003	0.013	0.016	0.007	0.019	0.016
V15 なまけ者の	0.000	0.000	0.024	0.008	0.000	0.025

しかしながら、対応分析をはじめとする数量化分析においては、しばしば第Ⅲ成分以降は無意味な情報を含むことがあるとされる(足立, 2006)。今回の結果でも、第Ⅲ成分には、形容詞として相反する「v22 不真面目な」と「v8 真面目な」が同じ符号を持って近くに存在しており、解釈が困難であるため、第Ⅲ成分を考慮しないことも考えられる。この場合でも対応分析は解に包含関係がある(足立, 2006) ために、第Ⅲ成分をとりあげなく

ても第Ⅰ成分及び第Ⅱ成分の解そのものは不変であるという性質がある。

また、君山(2002)によれば、概ね対応分析の結果は2次元で表現できることが多いとし、2次元でよく解釈できない場合は、誤差と考えられる程度の差異が強調された場合があるという。そして君山(2002)はこのような場合、①表現の工夫をすること及び説明できない対象を除くこと、②説明しにくい対象や項目を除いて分析し直すこと、③ノンメト

リック法の利用を勧めている。さらに、欠点を補う技法として、個人データの分析をするように勧めている。

また今回の対応分析の結果を見ると、第Ⅱ成分までの累積寄与率は約70%であり、それほど悪いわけでもない。

上記の点からは無理に成分Ⅲまで含めず、成分Ⅱまでで解釈をしたほうが、合理的である可能性がある。そこで改めて、成分Ⅰと成分Ⅱの2次元のみで、標的概念と形容詞群の関連を図示した(図4)。

図4は形容詞に日本語で略記名をつけ、標

的概念は、連想しやすいアルファベットと学生間を示す数字(1:大学生群, 2:高校生群, 3:中学生群)の組み合わせで表示した。楕円は標的概念のおおよその近傍を示した。この中に含まれる形容詞と関連性が深い事を示している。表4の障害のある生徒(学生)のデータと照らし合わせると、図4が図3よりわかりやすくまとまっているように思われる。

以後は図4(と表4)を中心に考察をすすめる。

学力優秀群は「v4 努力家の」「v8 真面目な」「v16 素晴らしい」「v29 うらやましい」「v22 不

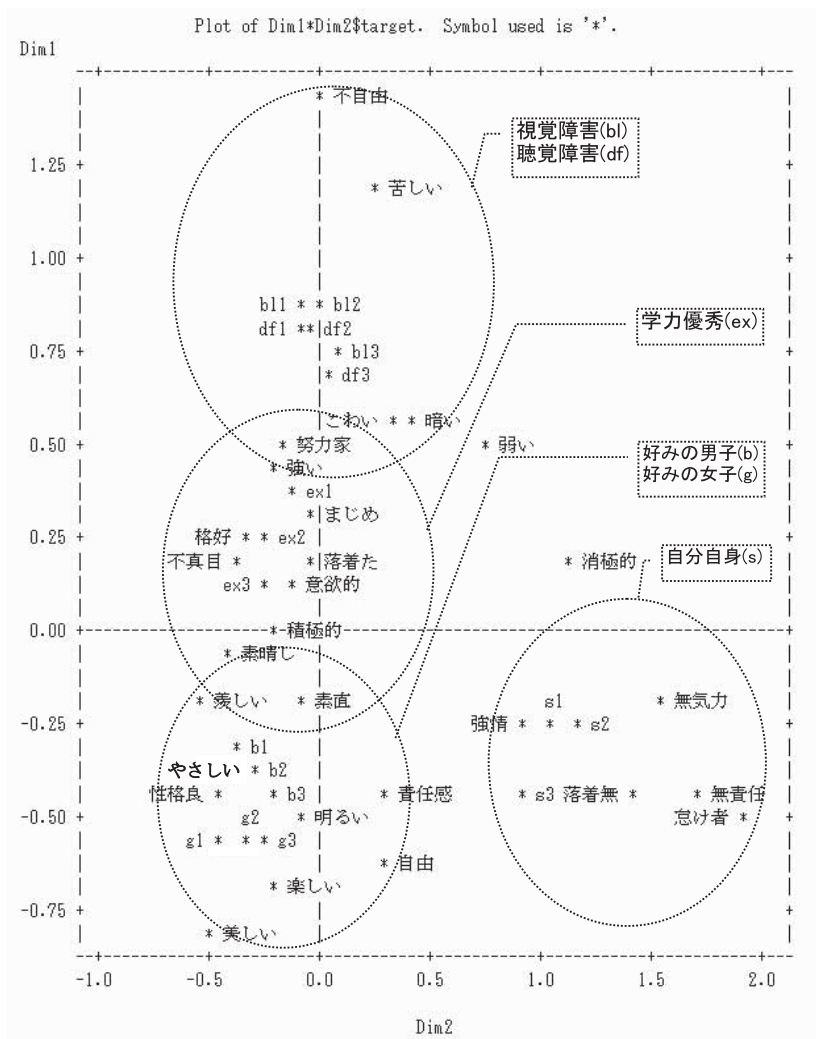


図4 標的概念と形容詞の対応2成分表示

真面目な」「v11 落ち着いた」「v5 意欲的な」「v18 積極的な」の形容詞で一つの群をなしていた。好みの学生群は、「v17 性格の良い」「v20 美しい」「v21 やさしい」「v12 明るい」「v14 楽しい」の近くに位置していた。この結果から、好まれる学生及び生徒は、性別に関係なく似たようなイメージが持たれていることが推察された。

### 学生群別視覚障害・聴覚障害によるイメージの違い

視覚障害の生徒(学生)及び聴覚障害の生徒(学生)の標的概念に対し想起された形容詞の出現頻度を学生群ごとに算出した表4で全ての学生群で、両障害に共通に出現率が20%を超えた形容詞は「v3 不自由な」「v4 努力家の」「v25 強い」、若干頻度が下がる群があるが、「v2 苦しい」であった。それ以後も選択率は10%代であるが、「v5 意欲的な」「v18 積極的な」など好意的な形容詞も選ばれていた。

学生群別及び障害種別について比較検討すると、大学生群では視覚障害の学生と聴覚障害の学生のイメージが多少異なり、視覚障害の学生の方が「v3 不自由な」で選択率が10%以上高く、また「v9 格好良い」が20%以上高かった。「v9 格好良い」については他の学生群も同様の結果になった(表4の枠で囲った部分参照)。

都築(1997)は視覚障害学生よりも聴覚障害学生の方が外見から視覚的に弁別しにくい点を挙げて視覚障害学生より聴覚障害学生を好意的に捉えているとしたが、今回の結果とは一致しなかった。むしろ、視覚障害学生のほうがはっきりと「大変で苦しい」ことが分かるだけに「強く意欲的で努力家」であると感心しているように思われる。大学生群について言えば、実際に視覚障害学生が通学していたことがさらに関係しているかもしれない。

また中学生群では、障害種別に関係なく他

の学生群より障害群に対し、選択率10%代の「v5 意欲的な」「v18 積極的な」などの形容詞の肯定的イメージが低いようであった。これらの変数は学年が上がるにつれて微増している。

これは山内(1984)が小学生を対象に行った研究で見られた、低学年は高学年よりポジティブなイメージを持つという結果とは異なっており、小学生と中学生以降の違いを示しているのかどうか、今後更なる検討が必要であろう。

しかしながら、全体的に見ると、「努力家の」「強い」「やさしい」など肯定的なイメージを持っている一方で、「不自由な」「苦しい」「弱い」など否定的なイメージを持っていることが明らかとなり、河内(2001)の結果を支持するものであった。以上、形容詞の出現率から障害によるイメージの違いについて述べてきたが、両概念の出現率に大きな差は見られず、河内(2001)の障害種別が異なっても全体的には共通したイメージのあるという考えを支持するものであった。

### 発達的变化について

中学生から大学生にかけての発達的变化は、あまり明確には捉えられないが、図4から自分自身群を除いて各標的概念の中での3から1への変化(3は中学生群、1が大学生群)は直線的であるように思われる。すなわち、好みの生徒群は成分Ⅱが小さくなる方向へ(男子群はさらに成分Ⅰが増加する方向へ)、学力優秀群は成分Ⅰが大きくなる方向へ、障害群は成分Ⅰが増加、成分Ⅱが現象する方向へと変化しているようである。

自分自身群については、高校生群(s2)と大学生群(s1)が同じレベルに達してしまつたとみれば、これも成分Ⅰが増加する方向へ変化していると見なすことも可能である。

そのように考えれば、標的概念や形容詞群との同時表示による表現ではわずかにしか見えないがある程度はっきりした発達的变化が

あると言えよう。

## まとめ

2次元および3次元での対応分析および、集計結果より以下のような結論が得られた。

1. 標的概念は障害群，学力優秀群，自分自身群，好みの生徒群の4群に分かれた。(図1～図4)。
2. 成分Ⅱにより自分自身群と，その他の群に分かれた。自分自身群は「v23 無気力な」「v27 落着きのない」「v6 無責任な」などスチューデント・アパシー的な形容詞に近かった。
3. 成分Ⅰにより障害群と好みの生徒群に大きく分かれ成績優秀群はその中間に位置した(図1)。
4. 視覚障害と聴覚障害は障害種別が異なっても，ほぼ同じような次元で捉えられていたが，若干視覚障害のほうが好意的に捉えられていた。
5. 発達的なイメージの変化はわずかであるが見られた。

なお，本研究は2005年度北星学園大学特別研究費の補助を受けた。

## [引用文献]

- 足立浩平 2006 多変量データ解析法-心理・教育・社会系のための入門- ナカニシヤ出版
- 鮑戸弘 1970 イメージの心理学 潮出版社
- 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究 33 (3), 253-260
- Kats,I. et al. 1988 Attitudinal ambivalence and behavior toward people with disabilities. In H.E.Yuker (Ed.), Attitudes toward persons with disabilities. Springer Publishing pp.47-57
- 河内清彦 1979視覚障害者(児)に対する学生および教師の態度—態度構造について— 特殊

- 教育学研究 17 (2), 19-32
- 河内清彦 1990肢体不自由者(児)に対する大学生の態度構造とその形成要因としての性別の役割について 特殊教育学研究 28 (3), 25-35
- 河内清彦 1993視覚障害のある児童に対する小学校高学年児童のイメージ 特殊教育学研究 31 (3), 17-26
- 河内清彦 1996視覚障害のある児童とない児童に対する小学校6年生のイメージの意味構造 特殊教育学研究 34 (3), 63-71
- 河内清彦 2001視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造—性及び専攻学科との関連— 教育心理学研究 49, 81-90
- 君山由良 2002 コレスポネンズ分析と因子分析によるイメージの測定法 データ分析研究所
- 島田睦雄・高木美子・秋庭信夫・熊谷信順・清宮栄一 1974 心身障害者の職業に対する雇用主等の態度 (2)—Semantic Differential法の結果— 職業研究所紀要 6, 39-51
- 都築繁幸 1997障害者に対する学生の態度に関する研究 (1)—専攻と障害との関係を中心に— 放送教育開発センター研究紀要 14, 21-35
- 中司利一 1988日本と韓国における大学生による肢体不自由児に対するイメージ 特殊教育学研究 25 (4), 29-42
- 生川善雄・那須理絵 2001 知的障害者に対する大学生の態度構造—専攻，性と関連づけての検討—東海大学健康科学部紀要 7, 45-51
- 山内隆久 1984視覚障害児に対する態度の変容におよぼす対人的接触の効果 教育心理学研究 32 (3), 233-237
- 山本安信 2004 人間発達学入門 教育出版センター 第4章
- 湯浅誉子・吉田昭久・小熊均 1996 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学, 芸術) 45, 17-96
- 吉本充賜 1987 障害者福祉への視座 ミネルヴァ書房

[Abstract]

Semantic Structure of Images of Visually and Hearing  
Impaired Students:  
Investigation of Junior High School Students,  
High School Students, and Undergraduate Students

Kazuma TOYOMURA  
Mari KIKUCHI

The present study investigated the meaning structure of images that junior high school students, high school students, and undergraduate students have of blind students and deaf students. 556 students were asked to select 29 descriptive qualifiers for each of the following concepts: "Blind Students," "Deaf Students," "Favorite Male Students," "Favorite Female Students," "Students with High Grades," and "Myself." A correspondence analysis and a cross tabulation table were used for the analysis.

Analysis via Correspondence analysis indicated that the meaning structure of images about "Students with Disabilities" and "Favorite Students" and "Students with High Grades," whereas the meaning structure of images about "Students with Disabilities" were the opposite of those about the others ("Myself," "Favorite Students," and "Students with High Grades.") Analysis via cross tabulation tables indicated that selectivity of the descriptive qualifier between "Students with Disabilities" was a few different, "Blind Students" had little more appreciated than "Deaf Students." Similarly, the meaning structure of images about "Myself" were the opposite of those about the others. A few developmental changes of the variables described above were seen.

---

Key Words: disorder, image, development